

二重に棄却されるジェンダー

—J. ハルバースタム『女の男性性』—

松田 康介

Jack Halberstam

Female Masculinity, Twentieth Anniversary Edition with a New Preface

(Durham: Duke University Press, 2019)

Kosuke MATSUDA

1. はじめに——男性性は誰のもの？

アカデミズムにはびこる男性中心主義とその弊害を指摘した第二波フェミニズムの運動から、現在につながる女性学 (women's studies) は誕生した。性差を構築するジェンダー概念という問題意識を女性学から受け継いで、これまで普遍的主体とされてきた男性の、あるいは男性性の存在を問い直す学問として登場するのが男性学 (men's studies) である。また、フェミニズム内部における様々な異議申し立てやセクシュアル・マイノリティの社会運動に呼応して、これらの学問はより幅広くジェンダーに関わる視点を包摂するようになった。このような 20 世紀後半のジェンダー／セクシュアリティ研究を取り巻く流れを単線的な進歩史観でもって捉える認識は時に危ういものではあるが、少なくともジェンダーを分析ツールとする研究者たちによって論じられる対象範囲は徐々に拡大してきたと言えるだろう。

しかし、それでもなお見過ごされている重大なテーマがあるのではないかと本書の著者である J. ハルバースタムは問いかける。そのテーマこそが、書名に冠された「女の男性性 (female masculinity)」である。女の女性性ならびに男の男性性については——しばしば前者は被害者性、後者は加害者性との連想のもとに——多くの論者による考察が積み重ねられてきた。男の女性性は、特にクィア理論で、男女二元論の「攪乱」を生じさせる契機として注目されるようになった。では女の男性性とは言うところ、なぜかフェミニズムにおいてもレズビアン・スタディーズにおいてもクィア理論においても、あるいは多様な男性性のあり方にアプローチしようとする男性学においても、あまり関心が払われてこなかった。ハルバースタムは本書の中で、この「なぜか」の正体を明らかにするとともに、「なぜか」およびそれによって温存されてしまう抑圧的なジェンダー規範への挑戦を試みている。彼によれば「女の男性性は、男の男性性が『ほんもの (the real thing)』であるように見せるためにこそ、支配的な男性性からはねつけられた残りかすとされてしまっている」(p.1) のだという。

女性身体によって遂行される^{ペフォーミング}男性性の歴史的記述と実証研究を通して男性性の社会における構築を明るみに出す本書のプロジェクトは、オリジナル版が発表された1998年当時において、まさに男と男性性との間の透明かつ強固な結びつきに楔を打ち込むものであった。本稿で取り上げるのは、同時代的な社会状況をふまえて新たに書き下ろしの序文が付された20周年記念版であるが、その他の部分でオリジナル版との文章の異同はない。

2. 著者について

ハルバースタム（1961～）はジェンダー理論・クィア理論を主な専門分野とする研究者で、現在はコロンビア大学において英文学・比較文学教授の職にある。本書『女の男性性』を含め、これまでに彼が発表している10冊の作品（うち単著7冊）は様々なトピックを研究対象として手広く扱ってきた。たとえば1995年の『スキンショー——ゴシック・ホラーと、怪物のテクノロジー（Skin Shows: Gothic Horror and the Technology of Monsters）』では19世紀イギリス文学からホラー映画までのいわゆる「モンスターもの」、2011年の『失敗のクィア・アート（The Queer Art of Failure）』ではアニメーション映画を中心とした大衆文化の分析がなされており、著者の博識ぶりがうかがえる。ジェンダー理論・クィア理論を代表する論者の一人とも称されるハルバースタムだが、彼の著作はいずれも未邦訳である。今のところ日本語で読むことができる彼の手になる文章は、竹村和子編著『欲望・暴力のレジーム』（2008）および『F-GENS ジャーナル』第10号（2008）に掲載されたお茶の水女子大学での講演原稿が唯一のものとなっている。そのため、本稿は『欲望・暴力のレジーム』収録の講演原稿、高橋愛訳「女の男性性——歴史と現代」を適宜参照する。

ハルバースタムは近年、自身のジェンダー・アイデンティティについて、男女二元論の枠組みの中ではどちらにも収まらないものだと言っている。“my pronouns”も浮動的であると述べ、現在署名に用いる男性名「ジャック」と出生時に名付けられた女性名との両方が使用されることを受け入れている⁽¹⁾。なお、本書のオリジナル版が発表された1998年当時は「ブッチ・レズビアン」とであると公言していた。以下に、彼が過ごした思春期の思い出が自伝的に記述された箇所を最終章の冒頭から引用する。

13歳の誕生日プレゼントに、私はサンドバッグとグローブを欲しがった。男性的な闘いに必要なこうした従装具は、私にとっては大人の女性になることから距離を置くための手段と映ったのだと思う。それに、ボクシングから同じような年ごろの男の子たちに対抗する術を学べるとも考えていたのだろう。かつての私は簡単に彼らをやっつけていたけれど、思春期の成長スパートを経て、今や彼らにやられっぱなしになってしまっていた。「女の子にボクシングはふさわしくないから、もっと女の子らしいものを選びなさい」と私は言われた。私の記憶する限りでは、女の子だから〇〇はできない、と告げられたのはこれが初めてだった。（p.267）

3. 本書の概要と意義

3.1 概要

著者によれば、「女の男性性」という現象は、一見固定された「男の男性性」が実際には不安定な構築過程にあることのひとつの証明である。目次は次のとおり（注釈等は除く）。

20 周年記念版への序文

序文

1. 「女の男性性」入門——男不在の男性性
2. 「歪んだ」現在中心主義——両性具有者、トリバード、^{フィエマール・ハズバンド}男装の夫人、そして 20 世紀以前におけるその他のジェンダー
3. 「はみ出し者作家」——ジョン・ラドクリフ・ホールと性的倒錯の言説
4. レズビアン・マスキュリニティ——ストーン・ブッチもふさぎ込む
5. トランスジェンダー・ブッチ——ブッチとトランス男性との間で起こる「境界戦争」、男性性の連続体
6. ブッチへのまなざし——「映画に出てくるブッチ」ガイド
7. ドラッグ・キング——男性性とパフォーマンス
8. レイジング・ブル（ダイク）——新しい男性性

20 周年記念版の刊行に合わせて執筆された序文では「女の男性性」にまつわる近年のメディア表象を概観しつつ、またオリジナル版の序文では「女の男性性」の学問的／社会的な等閑視を指摘しつつ、本書の問題意識が確認されている。ハルバースタムは「この本が女の男性性に関する議論の場を開放することで、男性的な女の子や女性が自身の男性性をスティグマではなく誇りや力に満ちたものと思えるようになってほしい」（p.xxiii）と思いを綴る。続く第 1 章の中で、著者はこれから開始される分析の手法と依って立つ枠組みを提示する。まず男性性の多様さを考えるヒントとして持ち出されるのが、スパイアクション映画シリーズ“007”の第 17 作『007 ゴールデンアイ』（1995）である。ジェームズ・ボンドはいつものように悪の組織と戦い主人公然とした男性性を発揮しようとするが、しかし、その男性性は女性上司“M”が体現する「女の男性性」の影に隠れてしまう。また、ボンドの任務遂行には欠かせない秘密兵器を提供するのは、「いかにもゲイで言ったらもうクイーンな科学オタク」（p.4）のエージェント“Q”である。著者によれば、このようなキャラクター配置は支配的な男性性がマイノリティの男性性に依存していることを暴露するのだという。この章では他に、女の子の「おてんば（tomboyism）」が行き過ぎたり思春期以降も続いたりするようであればそれを問題視する社会の女性観や、広義のトランスジェンダーおよび外見からは「他方の」性と判断されがちな人々を深刻に悩ませる「トイレ問題（bathroom problem）」についての言及がある。

第 2 章に関しては、章タイトルに登場する単語の説明がまず必要となるだろう。「『歪んだ』現在中心主義（perverse presentism）」^②とは、（今で言うところの）セクシュアル・マイノリ

ティの過去の社会生活や歴史を現代的な視点で解釈してしまう誤謬のことを言う。ハルバースタムはこの章で、女性に惹かれる女性を非歴史的に「レズビアン」とラベリングして語るのは『『歪んだ』現在中心主義』であり、レズビアニズム以前から存在した多様なセクシュアル・アイデンティティの内実とその変容過程を抹消してしまうのだと主張する。「男装の夫人」^{フイニエール・ハズバンド}はそうしたアイデンティティの一類型で、男性の恰好をして（時には男性としてパスして）女性との結婚生活を送る女性のことを指す。著者はアン・リスター（19世紀前半に実在したイングランドの女性貴族で、複数の女性との恋愛関係が有名）の遺した日記資料を取り上げている。第3章は、20世紀前半を生きた男性的な女性をめぐる言説を検討する。女性同性愛を描いた小説『孤独の泉』（1928）で知られるイギリスの作家ラドクリフ・ホールは、自身、男性的なアイデンティティに同一化するレズビアンであり「ジョン」という名前を使っていた。本章の終盤には、「現代のレズビアン批評家や歴史家、理論家が男性的な女性の身体と生活からレズビアンとしてのアイデンティティにまつわる理想化された歴史を読み取ろうとすると、『政治的にピュアなレズビアニズム (politically pure lesbianism)』の名の下で彼女たちの生きた意味に対してひどい暴力が加えられることになる」(p.109)と述べられている。これは『孤独の泉』の主人公スティープン・ゴードンが男性的に振る舞うレズビアンなのを、「女性を女性として愛するレズビアンが描けていない」と批判する一部の読者を念頭に置いた記述である。

第4章～第6章において主に考察の対象となるカテゴリーは、ブッチである。とりわけ「ストーン・ブッチ」——パートナーから性的に触れられるのを拒む超男役のレズビアン——に注目する第4章で、ハルバースタムは1970年代以降の一部のレズビアン・フェミニズムによるブッチ・フェム関係の否定を次のように批判する。ブッチの拒絶によって「レズビアンの性欲を可視化する唯一のシニフィアンが病的なものとみなされ」(p.121)のようになり、またフェムの拒絶によって「レズビアンの女性性をアピールする表現は制限され、中産階級の白人女性によるフェミニズムが『中性の美学 (androgynous aesthetic)』の中に落ち着くこととなってしまった」(p.121)。少し前の箇所でセクシュアル・マイノリティと性行為、それに人種との安易な連想が批判されていることをふまえると^③、著者は「異性愛規範を模倣・再生産する（と一部のレズビアン・フェミニストが考える）ブッチ・フェム役割がレズビアニズムから排除されることで、『性役割から自由な』レズビアンと『性役割に従順な』レズビアンとの間の（架空の）分断が生まれ、後者の病理化を通してかえってレズビアンの負のスティグマが強化された」のだと指摘しているように思われる。本章および次の第5章は、レスリー・フェインバーグの小説『ストーン・ブッチ・ブルース』（1993）を題材として、同時代的な「女の男性性」の考察に取り組んでいる。なお、本書で批判的に参照されているトランス理論家ジェイ・プロッサーの『ストーン・ブッチ・ブルース』読解およびハルバースタム・プロッサー間の論争については戸梶（2009）に詳しい。ストーン・ブッチが引き起こすジェンダーの攪乱は、J. バトラーも説くところである。バトラーによれば、ストーン・ブッチは性行為において主導権を握るが、同時にパートナーに性的快楽を与えるため奉仕することで、男性役割と女性役割との間を越境する（Butler 1991, p.25）。しかしハルバースタムは、バトラーの言う「奉仕」とは男性のための自己犠牲という女性に伝統的に課せられてきた行動原理であり、相手の女性を性的に満足

させることで快楽を得るストーン・ブッチの愛情表現を捉えきれていないと批判を加える。

第5章は、ブッチ・レズビアンとトランス男性の関係についての考察である。基本的にこれらふたつのカテゴリーは性別適合手術の有無によって区別されるが、そのためにブッチ・レズビアンよりもトランス男性の方が「ほんもの」の男だとみなされる傾向にある。たとえば「トランス男性が真に迫った必死の身体改変欲求と、ブッチが『遊ぶ男性性欲しさ (a playful desire for masculinity)』や大したことのないジェンダー逸脱と関連付けられる」(p.143) こともあれば、「レズビアン同士でいる状況で、ある人の男性性が『ほんもの』になり過ぎたとき、あるいは冗談と真剣さとの間に引かれた一線を越えたとき、問題が生じる」(p.151) こともある。男性性を獲得すればするほど男になっていく、と仮定する「男性性の連続体 (the masculine continuum)」パラダイムを捨て去る必要性があると主張する著者は、「トランスジェンダー・ブッチ」という造語を用いて、男と女の二極に引き裂かれた二分法からの「女の男性性」の救出を試みる。第6章の英語タイトルは“Looking Butch”となっており、ハリウッドや自主制作などいろいろな映画がブッチをどのように表象してきたかについて論じている（図版の多い本書の中でも特にふんだんに写真が掲載されており、それもあってページ数は最多）。まず提示されるのは、「ポジティブイメージ」と「ネガティブイメージ」をめぐる議論である。セクシュアル・マイノリティの社会運動はメディア上で描かれる彼／彼女らについてのステレオタイプの表現を指摘し是正するよう働きかけてきた。もちろん悪意ある「ネガティブイメージ」に基づいた作劇も多々あったのだが^④、たとえ「ポジティブイメージ」が増えたところで一面的な描かれ方であるのには変わらないのであり、そもそも『ポジティブイメージ』の映画が面白い、というわけではない」(p.184)。ハルバースタムは映画に登場するブッチを「おてんば」、「略奪者」、「ファンタジー・ブッチ」、「トランスヴェスタイト」、「かろうじてブッチ」、「ポストモダン・ブッチ」の6カテゴリーに分類している^⑤。

男装パフォーマンスとしてのドラッグ・キングが、ドラッグ・クイーンから数十年ほど遅れて登場し、またメディア等でそこまで大々的に取り上げられることが少ないのはなぜか。第7章では、複数人のドラッグ・キングへのインタビューを交えつつ、「女の男性性」がパフォーマンスの視点から論じられる。著者は実際にドラッグ・キングの出演するコンテストやショーに通い、男性性の演じられ方を観察している。ここでは第4章と同じくバトラーの議論が批判的に継承され、パフォーマンスの現れ方が「女装する男」と「男装する女」とでは異なることが実証的に確認されていく。男装がレズビアン・バーの文化においてあまり一般化しなかったのは「社会で生きていくため時には男性としてパスする必要があるブッチにとって、『キャンプ (camp)』^⑥をするような余裕はない」(p.234) からであり、また『男の男性性』がパフォーマンスされるようなものではないと定義されている」(p.234) からだという。つまり「男の男性性」はあまりにも自然化されていて、改めて再演することが難しい。著者が観たドラッグ・キングのコンテストは、楽しめたは楽しめたものの、「ドラッグ・キングたちはドラッグ・キングとしての演技の方法がわからなかったようで、『何かやって』と声をかけられても次から次に自分の名前をぼそぼそ呟くだけだった」(p.245) という。ドラッグ・キングのパフォーマンスが真に「キャンプ」なものとなるのは、「パフォーマーが演じる男性性に自分自身の女性性

が吹き込まれ、男性性をねじ曲げる時」(p.238)、つまり男性的に振る舞うパフォーマンスが(意図的な)失敗に終わる時である。もっとも、自然化されているのは白人異性愛男性が体现するような支配的な男性性であって、ドラッグ・キングの中には有色人種の男性やゲイ男性を演じる者もある。本章の後半では、ドラッグ・キングたちの肖像写真とともに「女の男性性」を演じる戦略の複数性が分析される。

最後の第8章は、これまで展開されてきた女性同性愛者の男性性の議論から離れ、異性愛者を含めた女性ボクサーの男性性が考察される短いパートである。彼女たちはしばしば「肉体的なタフさは女性性を消耗するわけではない」(p.270)、あるいは「女性が闘うボクシングは真の女性性を表現するものだ」(p.271)と自身が観客から投影される男性性にエクスキューズをつける。このような認識は広く共有され、またいまだにスポーツ界のミソジニー・ホモフォビアは残存しているものの、著者は伝統的に男性性を披露するための舞台であったリングで殴り合う女性ボクサーの活躍が、「女の男性性」への制限を振り切るものとして高く評価する。表紙に描かれたブッチの男性的な風貌とその力強さを讀えつつ、本書は締めくくられる。

3.2 意義

著者は本書の中で、男性的な女性が男性中心主義的な社会からは「性的倒錯」のスティグマを当てはめられ、フェミニズム・レズビアニズムからは「裏切り」(p. xviii)を働く背反者として追放されるという不条理な境遇にあることを繰り返し繰り返し訴えている。「男の男性性」が唯一の男性性なのか、女性が男性的に振る舞おうとするのはただの真似事であるのか。現在のジェンダー規範から配当を得るグループとその経済システムに異議を唱えるグループとが異なる仕方、しかし共通のレスポンスを男性的な女性の振る舞いに対して返す。本書の意義として第一に挙げられるのは、このような板挟み、あるいは爪はじきの状況にある女性の過去／現在における存在をクィア理論のフィールドにおいて可視化したことであり、また付け加えておくべきは「女の男性性」が称揚されるのは決して男性性が女性性よりも優れていると著者がみなすからではない点である。20周年記念版の序文でハルバースタムは、20世紀初頭のユダヤ人思想家オットー・ワイニンガーの性理論に言及している。ワイニンガーは、女性解放運動は男性的な女性によって担われるべきであり、もしも女性が自由の身になることがあるとすれば、その恩恵は男性的な女性にのみ与えられるべきだと考えていた。また、男性的な女性とはレズビアンであるとの信念も持ち合わせていた。逆に言えば、彼にとって女性を愛する女性は全員が全員ほんとうは「男性」なのである。さらに、ワイニンガーは『性と性格』(1903)の中でユダヤ人は女性的な人種であり、それゆえに劣っていると述べていた。男性が着るような服装を自分も着たい、男性に従事するような仕事に自分も加わりたい、と望む女性の自己決定権を擁護する際に、たとえばワイニンガーが無邪気にも語るような男性中心主義と「ジェンダー・アイデンティティがどうであれ性的指向は異性に向くものである」という一種の器用なホモフォビアとが合体した言説が採用されたなら、いったいどのような事態が生じるだろうか。「女の男性性」は「女の女性性」の犠牲の下で社会への進出を果たす一方で、異性愛規範に逆らうと認定されるためにさまざま抑圧を受けると予想がつく。本書の第4章では、異性愛規範に抵抗

するレズビアン・フェミニズムのブッチ・フェム役割排除が逆説的にレズビアンの病理化を推し進めることになる」と論じられていたが、「女の女性性」の排除は女性間の分断およびミソジニーのより一層の強化につながると言える。著者が言うように、「女性がボクシングの世界に参入しても、ドラッグ・キングがテレビ番組に登場しても、あるいはブッチ主演の映画が公開されても、それだけで『女の男性性』に対する文化的・社会的・政治的な禁制が覆されるわけではない」(p.273)。しかし女性的なアイデンティティに同一化しない女性の存在は、物言う反例として男女二元論を切り崩す可能性をたたえている。以上が『『男の男性性』が唯一の男性性なのか』という命題に関連して、本書から読み取られる意義であった。ただし著者は、「女の男性性」が——「男の男性性」と重なり合いつつ——行使する負の影響力を考察する作業には注力していない。この点については後述する。

「女性が男性的に振る舞おうとするのはただの真似事であるのか」。著者は第5章で、「トランス男性の移行を単にジェンダーを根拠とするヒエラルキー内での上昇の願望から説明しようとする愚かな評論家はまずいないだろうが、女性から男性への性別適合手術は、その人に何らかの社会的・政治的影響をもたらすのである」(p.143)と述べる。第7章では、男装や男性的な身体技法を学びたい女性のための「ドラッグ・キング・ワークショップ」が紹介され、著者はこれがドラッグ・キングの文化に位置づけられることは認めつつも「多くの生徒は男装をすることで得られる権力と特権がどのように感じられたかについて話し合い、何もかもに興奮しながらも、その日の終わりには慣れ親しんだ女性性に帰還してホッと落ち着く」(p.250)とあまり高くは評価していない。フェミニズムがトランス男性に冷ややかな視線を送るとき、強調されているのは「男性としての特権」である。近年特にTwitterなどインターネット上で急速な広がりを見せるフェミニズムのトランス女性排除も、トランス女性が少なくとも非トランス女性よりは「男性としての特権」に近い生活を送ってきたとの認識に基づいている場合が多い。「女の男性性」を肯定的に論じようとする本書でも何度か話は出るが、女性から男性への性別移行はそれがトランス男性のように身体変形を伴うものであっても、ブッチ・レズビアンや狭義のトランスジェンダーのように外見と身体技法を操作するものであっても、あるいはワークショップの生徒たちのように比較的簡易で一時的なものであっても、周囲から男性とみなされることに「成功」すれば社会的なステータスは多少なりとも変わる。すなわち、男性と女性とでは見える世界（見せられる世界）が実際に違う。ただしこの非対称性は性別移行を果たした個人が負うべきものではなく、むしろ社会の性差別構造に原因を求めるべきものである。様々な社会的序列がそれぞれの人間の位置を規定していることを考えれば、「男性としての特権」言説は、広義のトランスジェンダーがフェミニズムの議論の場から排除されることに十分な正当性を与えるとは言えない（小宮 2019, pp.139-40）。ハルバースタムが第1章で考察している「トイレ問題」は、「男性だ!」と呼びかけられがちな女性が女性トイレに入ることおよび「女性だ!」と呼びかけられがちな男性が男性トイレに入ることの難しさを説明するものである。多くの男性は女性侵入者の存在が頭にないため、トランス男性は男性トイレを無事に利用できる公算が大きい。しかし、もしも周囲の男性に何らかのきっかけで詰められた場合は危害を受けるおそれもある。一方でトランス女性は周囲の女性利用者から（他の女性に対してと同じく）

厳しいセックス・チェックを受けるが、目をつけられたとしてもすぐさま「罰」を受けるわけではない。いったん誤って男性であると認識されると、その人物は男性侵入者として恐怖の対象になるからである。この「トイレ問題」においてもやはり、「男性としての特権」が議論に絡んでくることがわかる。一部のレズビアン・フェミニズムによるブッチ-フェム関係の否定も、男性を上位に置く一夫一婦制を模倣することの忌避によるものであり、一連の現象はミサンドリーの概念に引きつけて考えることもできるのではないだろうか。「女の男性性」が社会から不快感を持たれるのは、ハルバースタムによれば、それが「男の男性性」の単純な模倣だと誤解されているからである。ここで嫌われているのは男性性そのものであるのか、それとも男性性を男性でない人間が略奪する傲慢さであるのか。男性身体への嫌悪感の現われであるケースも十分に考えられる。これらを区別して分析することで、男性性の権威はより適切に解体されるだろう。

4. 考察

4.1 ふたつの注釈

本書が一貫して論じるのは、「男の男性性」に回収しえない「女の男性性」がオルタナティブな男性性のモデルとなる可能性である。前述したとおり、ハルバースタムの研究が意図する男性的な女性の可視化は、男と男性性とが結ぶ排他的な結びつきを解除するように働くかもしれない。しかしこのような議論を多様なジェンダーの平等という目標に向けて受け継ぐためには、次に説明するようなふたつの注釈が必要である。

まず目を向けたいのは、「男性性」「女性性」という概念の使用法である⁹⁾。著者が全8章を通して行っているのは、男が男性性を所有し女が女性性を所有する図式を標準的なものとして留めるジェンダー規範の解体である。この試みは、男性的な女性のあり方を表現する様々なカテゴリーについての緻密な分析を通してほとんど成功しているように思われる。しかし、「男の女性性」および本書の主眼である「女の男性性」が、ただ「男の男性性」および「女の女性性」に付け足される2種類のオプションであるならば、固定的な男女二元論は維持されたままだと考えられる。なぜなら、ラインナップされた4カテゴリーの名辞に含みこまれたジェンダーは結局のところ男／女の二元のみであり、また「男性性=『男の男性性』+『女の男性性』」と「女性性=『女の女性性』+『男の女性性』」とのセットが改めてふたつの極に配置されるからである。第8章で著者は「おそらく私たちは男性性を女性にまで拡張しようとしながら、同時に女性性を少年少女にとって安心できる居場所であるようにする努力を重ねるべきなのかもしれない」(p.273)と語っている。男性性と女性性の領域を「拡張する(extend)」、つまり境界を重ね塗りして曖昧なものにしていくことが肝要なのであり、ただ単に女性のアイデンティティの選択肢に男性性を、男性のアイデンティティの選択肢に女性性を用意するだけでは不十分なのである。男性性と女性性との境界が曖昧なものになれば、広く性のあり方はグラデーションを帯びることになる。ただし、ここで言うグラデーションが「男性性の連続体」のように極へ近

づけば近づくほど「ほんもの」であると認定する構図であってはならない。男性性研究のフィールドにおいても日常生活においても、男らしくあることの規範を分節化していくことが重要である。ちなみに本書では R. コンネルの説く「複数形としての男性性 (masculinities)」を連想させるような考察が行われつつも彼女の論考は参考文献として挙げられていないが、これはおそらく著者が「男性学の女性バージョン」を志向していないためだと考えられる。男性的な女性の社会生活とその歴史は、著者によれば、男性身体によって構築されてきたとされる伝統的な男性性に依存するものではない。アイデンティティの選択肢を人間の数だけ用意しつつそれぞれの「程度」をひとつの評価軸に落とし込まないようなモデルの構築は、ジェンダー／セクシュアリティ研究に課せられた今後の論点である。

加えて必要になるのは、「女の男性性」を普遍化することの回避である。ブッチが登場する映画の分析に費やされる第 6 章は、日本やブラジルで制作された映画にも言及している。ここにおいて、著者は地域による男性性の描かれ方の違いに配慮を示しているようである。ただその他の部分の記述では、もっぱら欧米圏の女性同性愛者やドラッグ・キングのパフォーマンスを用いて、「女の男性性」が引き起こしうる攪乱を一般的に論じるのである。『『歪んだ』現在主義』については時代による文脈の違いを無視した語り方であるとして注意喚起されるが、たとえば「レズビアン」や「ジェンダー」といった言葉が文化の外部から輸入されるまでは存在しなかった地域における「女の男性性」がわずかに取り上げられるのみであるのは、場所による文脈の違いを無視することになってしまいかねない。クィアにまつわる時間と空間と言えば、ハルバースタム自身が 2005 年の『クィアな時間と空間の中で (In a Queer Time and Place)』においてある問題提起を行っている。彼は「メトロノーマティヴィティ (metronormativity)」という概念を提唱し、地方に住んでいてジェンダー／セクシュアリティを理由に迫害を受ける人々が都会へと時間的・空間的に移動することで温かな歓迎に出会い幸福を得る、というナラティヴを批判的に捉えた。河口 (2016, p.75) の整理するところによれば、ハルバースタムが問題化するのは「都市におけるクィア自体が規範化され、それとともに農村や非大都市圏に居住し生活するクィアの姿が不可視化されてしまうこと」である。『女の男性性』第 7 章で登場するドラッグ・キングたちは皆サンフランシスコやニューヨークに居住しており、対照的に地方部で暮らす男性的な女性はメディアであまり描かれることがない。国内の地域差をただちに文化間の差に拡大して論じることは難しいものの、「クィアの歴史」が語られない場所に生きる「クィアの歴史」は、ある特定の地域の価値観に基づいた判断によって抹消されている場合があると考えられる。ジェンダー／セクシュアリティ研究には、「インターセクショナリティ (intersectionality)」の視点が欠かせない。

4.2 ポストフェミニスト・マスキュリニティ

「インターセクショナリティ」という単語によって表されるのは、男性性、より一般的にはジェンダーが階級や人種など様々なカテゴリーと結びついて規定され、またそれらを規定するという事実である。実は第 3 章で取り上げられたジョン・ラドクリフ・ホールは反ユダヤ主義者のファシストだったことで有名なのだが、ハルバースタムは彼女の保守的な政治的態度を即

座に男性性と結びつけて考えることは避け、「階級意識と、社会主義・共産主義への恐怖」(p.94)こそが理由であったと論じる。ある人物の振る舞いを、ひとつの属性——ここでは「女の男性性」——に還元してしまう思考に得がないことを、著者は賢明にも述べているのである。実際、本書は「歴史を鑑みると、女性への抑圧と男性性を分けて考えることは不可能ではないにしろ困難であるが、セクシズムやミソジニーは必ずしも男性性の本質ではない」(p.4)、「ドラッグ・キングは彼女自身の男性性とその劇化を通して、ミソジニーと男性性の間には本質的なつながりなどはなく、むしろ家父長制や『男の特権』という状況下において構造的に男性性がミソジニーに陥るということを示す」(p.255)と主張している。これらの意見は、いわゆる「女性的」ではない女性の存在を目に見えるようにする本書のねらいと合致している。

しかし、ここで考えたい。男性性の脱自然化と、「女の男性性」の非逸脱化。これらふたつの目標を達成するに向けての手立てを講じつつ、いわゆる「男性的」な集団に参加している女性による他者への加害や抑圧を、どのように捉えればいいのか。ハルバースタムは決して「女の男性性」の発露としての暴力を無視するわけではなく、2004年の来日公演時には^⑧、まさにその当時大スキャンダルとなっていたアブグレイブ収容所での女性を含むアメリカ兵たちのイラク人捕虜虐待を「有害な男性性 (toxic masculinity)」と結びつけて語っている。「覇権的な男性性が男の身体から女の身体へと移動するときに、それがかならずしも政治的変容を呼び起こすわけではない」(Halberstam 訳書, 2008, pp.151-52)。本書で論じられたように、歴史を通して男性的な女性は、現在私たちがその存在を想定するような男性性の構築に寄与してきた。これはなにも過去に限った話ではなく、現在進行形で「女の男性性」は男性性の規範を再生産しているのである。「女性が男性化する」という表現は危うさを含むものだが、男性性を体現することが求められる空間で女性は支配的な男性性に同一化すると言える。

それがたとえば軍隊内の女性兵士による暴力の実践である。あるいは、ポストフェミニズムの言説状況を「女の男性性」から考えることができるかもしれない。三浦 (2013, p.62) は『ポストフェミニズム』とは、『フェミニズムは終わった』という認識であり、また、フェミニズムが終わったとして『その後の女の問題』という意味でもある」としている。ジェンダー不平等の是正に向けた連帯の必要性を消極的に否定するポストフェミニズムは、個人の能力主義的達成を称揚する新自由主義との親和性が高い。ジェンダーのあり方に関する多様な選択、よりここでの文脈に引きつけて言えば、女性による新たな「オプション」としての男性性の領有を善きものとする国家あるいは資本主義のプロジェクトには、フェミニズムへの忌避の態度を伴った男女二元論の再強化という罣が潜んでいるように思われる^⑨。もしそうであるならば、「女の男性性」は男性性の構築を批判的に捉えるジェンダー／セクシュアリティ研究の術語であると同時に、「時代遅れの」フェミニズムを丸め込むためにより鍛え上げられた新・男女二元論の依拠する社会現象としても立ち現れてくるだろう。労働市場に参加する女性が体現する「女の男性性」は——男性的「企業戦士」のイメージが周縁化されつつある現状およびハルバースタムが本書の第7章において提唱した「男の男性性」のノンパフォーマティヴィティを参照すれば「女の中中性性」とでも説明できるかもしれないが——家庭内のアンペイド・ワークやケア労働に従事する女性が体現する「女の女性性」の対極に配置される。

河野（2019, pp. 36-37）によれば、ポストフェミニズム=ポストフォーディズム=新自由主義下のマスキュリニティ（男性性）は、旧来のマッチョイズムと「やさしくて知的な」アッパー・ミドルクラスのそれとの間の「偽の対立」によって行き場を失い、それゆえ反ポリティカル・コレクトネスおよび反フェミニズムの感情へと動員されてしまう。男性性の覇権をめぐるこの対立が「偽」であると言えるのは、前者が別に社会から排除されたわけではなく、後者はまだまだ現実には少ない理想的な人物像にすぎないからである。河野は自著で、ポストフェミニズムが演出する「勝ち組女性」対「負け組女性」の対立がもたらす階級問題の排除を分析しているが、「女の男性性」にも（『女の男性性』にも、ではない）現在稼働中の抑圧的なジェンダー規範を反映させる余地が残されてしまっている。

ジェンダーの平等が既に達成されたと語られる社会で、女性がいわゆる「男性的」な生き方を選択すること、そしてその選択を支持することや非難することがそれぞれどのような意味合いを持つのか。この問いは興味深いものであり、またこの問いになお含まれる男女二元論を相対化するためのヒントを、本書『女の男性性』でハルバースタムが展開した「女の男性性」の議論は与えてくれる。

〈注〉

- (1) Halberstam, Jack (*see also* Halberstam, Judith), 2012, “On Pronouns,” Jack Halberstam: gaga feminism and queer failure..., September 3, 2012, (Retrieved January 8, 2021, <http://www.jackhalberstam.com/on-pronouns/>).
- (2) “perverse”は「(性的に) 倒錯した」という語義も持ち、これは一種の地口である。
- (3) 「現代の文化的なステレオタイプでは、ゲイ男性は極端な性欲と結びつけられる傾向があり、白人のレズビアンからはいまだに不感症や霊的な冷たさが連想される…（中略）…黒人のレズビアンはしばしば『雄々しいブッチ』や『性に食欲』といったステレオタイプな視線を向けられる」（p.114）。黒人女性の男性性について、ハルバースタムは20周年記念版の序文の中で、黒人女性アスリートの活躍がアスレティズムの文脈で語られがちだと論じている。
- (4) 明確な悪意を持ってセクシュアル・マイノリティ（あるいはそのように解釈される可能性がある人間）を「悪役」と設定する創作者が、現在でも存在するのは事実である。Reiss Smith, 2020, “JK Rowling’s latest book is about a murderous cis man who dresses as a woman to kill his victims,” PinkNews, September 14, 2020, (Retrieved January 8, 2021, <https://www.pinknews.co.uk/2020/09/14/jk-rowling-new-book-cormoran-strike-troubled-blood-killer-dresses-woman/>).
- (5) これら6つのカテゴリーについて、第6章の中で紹介される映画作品のうち、図版入りで解説されているものを具体例として次に挙げておく。「おてんば」……『タイムズ・スクエア』（1980）・『結婚式のメンバー』（1953）・『略奪者』……『大砂塵』（1954）・『黒い罌』（1958）・

- 『甘い抱擁』(1968)・『女囚の掟』(1950)、「ファンタジー・ブッチ」……『エイリアン 2』(1986)、「トランスヴェスタイト」……『カラミティ・ジェーン』(1953)・『クリスチナ女王』(1933)・『オランダ』(1993)・“Vera”(1987)、「かろうじてブッチ」……『フライド・グリーン・トマト』(1991)、「ポストモダン・ブッチ」……『サーモンベリーズ』(1991)・『バウンド』(1996)・“Set It Off”(1996)。
- (6) 同性愛者、特にゲイ男性の文化でクィアネスを誇張したパフォーマンスの様式および美学。
- (7) A. ギデンスは、男性／女性を一般化して記述する際は、あくまで「多くの場合は (in many instances)」そう言えるに過ぎないことを留意する必要があると述べる (Giddens 訳書, 1995, p.195)。
- (8) 講演原稿の邦訳が刊行されたのは 2008 年である。
- (9) 「男女共同参画」という理念の下で日本政府が推し進める女性活用政策、マスメディアが喧伝する「女性の活躍」言説、そしてインターネット上の言説空間は「女性差別はなくなった」「にもかかわらず『女性には差別されている』というプロパガンダを唱えるフェミニズム」への反感を再生産し、また拡大させている (菊地 2019, pp. 80-81)。

〈文献〉

- Butler, Judith, 1991, “Imitation and gender insubordination,” Diana Fuss eds., *Inside/out: Lesbian Theories, Gay Theories*, New York: Routledge, pp.13-31.
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Stanford: Stanford University Press. (=松尾精文・松川昭子訳, 2005, 『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.)
- Halberstam, Judith (see also Halberstam, Jack), 2008, “The contradictions of female masculinity before and after Abu Grahbi,”. (=高橋愛訳, 2008, 「女の男性性——歴史と現代」竹村和子編著『ジェンダー研究のフロンティア 第5巻 欲望・暴力のレジーム——揺らぐ表象／格闘する理論』作品社, pp.142-53.)
- 河口和也, 2016, 「わたしたちはここにいる——地方中核都市に生活する性的マイノリティの『語り』から」『理論と動態』9: pp.73-91.
- 菊地夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』大月書店.
- 小宮友根, 2019, 「フェミニズムの中のトランス排除」『早稲田文学』10(21): pp.132-42.
- 河野真太郎, 2019, 「ポストフェミニスト・マスキュリニティ、または、ブラピカセラピーかの映画史」『早稲田文学』10(21): pp.28-40.
- 三浦玲一, 2013, 「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性——『プリキュア』、『タイタニック』、AKB48」三浦玲一・早坂静編著『ジェンダーと自由——理論、リベラリズム、クィア』彩流社, pp.59-79.
- 戸梶民夫, 2009, 「クィア・パフォーマンスティヴィティと身体変形実践——トランスジェンダーの性別移行に見る移行目標の実定化と恥の解決」『ソシオロジ』54(1): pp.69-85.